

カトリック 仙台教区報

2005年9月4日 No.165

発行
カトリック仙台司教区

〒980-0014 仙台市青葉区本町1-2-12

Tel (022) 222-7371 Fax(022)222-7378

発行責任 広報委員会

URL ; <http://sendai.catholic.jp/>

「主よ、一緒にお泊まりください」 カトリック宮城県大会 基調講演から

講師 仙台教区管理者 平賀 徹夫

聖体の年

今年は聖体（エウカリスティ
ア）の年です。昨年10月、メキ
シコのグアダラハラで国際聖
体大会が開かれ、今年の10月に
はバチカンで、「聖体
教会生活と宣教の源泉
と頂点」というテーマ
で世界代表司教会議が
開かれます。昨年の10月
から今年の10月まで、こ
の1年をヨハネ・パウロ
2世教皇は「聖体の年」
と決めました。

「聖体の年」は何を目
指すのかということとは、
回勅『教会にいのちを与
える聖体』の第2項にあ
ります。「聖体の秘儀を
生かすことに特別に専
念する年にしましょう」という
ことです。そして「聖体の年」
にあたり、使徒的書簡『主よ、
一緒にお泊まりください』が発
表されました。これから、この
使徒的書簡に沿って話したい
と思います。

主が一緒に
『主よ、一緒にお泊まりくだ
さい』は、ルカ24章13節、35節

を下敷きとしています。

エマオに向かう二人の弟子は、
一緒に歩いている方がイエスだと
は知らずに、その同行の旅人と語
り合い、また語ってもらった聖書の



キリストの聖体

わかった。しかし不思議なことに、
そのときイエスの姿は見えなくな
ったとルカ福音書は記します。
ヨハネ・パウロ2世は次のよう
に書いています。「主は、パンを
割くことの中に身を隠して彼らと
一緒に留まることとなります」、
「このことは、神の民の深い信仰
のうちに常に意識されていなければ
ならないことです」と。この眼

でイエスの顔
を見ることは
できないが、
イエスは私た
ちのところに
確かに留まる
という方法を
残されたので
す。

ペアト・アンジェリコ
ミサの構造
エマオに向
かう二人の弟
子の話は2部
に分かれてい
ます。一つは、

道タイエス様が聖書を説明してく
ださったこと、次に、宿で一緒に
食事をしたこと。これは私たちの
ミサと同じ構造です。まず、言葉
の食卓。神の言葉をいただく。そ
れを味わう。それによって心が燃
え立っていく。そしてキリストと
完全に一致する準備が整えられる。
こうして主の食卓にあずかります。

「ことばの典礼」のないミサはあ
りえませんが、聖体拝領に間に合え
ば良い、ということではないので
す。

ギリシャ語の「エウカリスティ
ア」という言葉は、「感謝の祭儀」
「聖別されたパン・キリストのか
らだ（聖体）」「感謝すること」な
どと訳されます。「カトリック教
会の教え」には、「聖体」は静止
的な感じを与えますが、「感謝」は
ダイナミックな概念です。「感謝
する」ということは「記念する」
「聖餐にあずかる」…「礼拝」な
どの概念へと広がっていく内容を
含んでいます。聖体と感謝という
二つの意味の間に連続性を見出す
ことは容易ではありませんが、
「聖体」という表現にとらわれて、
聖体の秘跡の理解を偏ったものに
しないよう留意したいものです」
とあります。私たちがいたたく聖
体は私たちをキリストに変えてい
くためのものです。私がキリスト
へと変えられていく、そこで、礼
拝・感謝・奉獻・新しい契約にあ
ずかる、ということにつながって
いきます。

「聖体」の三つの側面
聖体の秘跡の重要な事柄は大き
く三つあります。一つは、食事で
あるということ、二つ目は、キリ
ストの超越の記念、三つ目は、終
末の先取りです。

（2頁へ）

「食事」、この秘跡は過越の食事の席で定められたものです。イエスは「わたしの肉はまことの食べ物、わたしの血はまことの飲み物」、「わたしの肉を食べ、わたしの血を飲む者は、いつもわたしの内にあり、わたしもまたいつもその人の内にいる」とはつきりおっしゃいました。私たちがミサの中でいただく聖体は、キリストの肉、キリストの血そのものだ、という事です。とても理解しがたいことです。だからこそ信仰が必至なものです。そのうちにこれは単に「共に」というより、もっと親しくキリストが私の「中」に来てくださるといふ、一層すばらしい形で留まってくたさるということ

です。二つ目は「過越の神秘の記念」、十字架に付けられた捧げ物としてのキリストの奉獻です。この奉獻について、『教会にいのちを与える聖体』にこうあります。「聖体のいけにえは、人類の救いにとって決定的に重要なものでした。イエス・キリストは自らをいけにえとしてささげ、御父に返す前に私たちがその場にいたかのようにしてそれにあずかる手段を私たちに残してくださいました。こうして、信者の一人ひとりには聖体にあずかり、尽きるごとのない報いを得ることが出来ます。」

三番目は「終末の先取り」です。聖体は、2000年前に起こった

出来事を現在化するということですが、それだけでなく、キリストが歴史の終わりに再び来られるその未来に向けて、私たちを駆り立てるものでもあります。キリストがもう一度来られる、そのときに向かって希望を持って進んでいくのだという、終末の視点です。

こうして私たちが聖体に近づくときは、「キリストご自身に近づくのだから」ということを十分に意識する信仰が求められます」と、**教皇は書いています。**

あなたがたのためのミサの中の聖別の祈りで司祭は唱えます。「...これはあなたがたのために渡されるわたしのからだ...」このキリストのからだ

と血をいただく私たちは、いただいたキリストを私のところとどめてしまおうわけにはいかないのです。私も、あなたがたのために渡される体、罪の赦しとなるキリストの血「になっていくのです。私たちが「主よ、一緒にお泊まりください」と呼びかける以前に、実はイエス様の方から「わたしにつながっていないさい」と呼びかけてくださっているのです。そしてそのつながっている方法はすでに用意されています。「聖体の年」にあたって、ミサが私たちの生活の中心に据えられるように、ミサの典礼をもう一度よく勉強してみましよう。

また、ミサ以外での聖体礼拝や聖体訪問等で、「イエスの語りかけをきくために、またあたかもその心臓の鼓動を感じるためであるかのように根気強く待つ」準備ができていたら良い、と勧められています。

一致の源泉

聖体祭儀にあずかる私たちは、本当に一つになっているか、兄弟的な交わりができているかを問われます。「使徒たちの周りに集められ、神のことはよって召し出され、霊的なことがらだけでなく物的なことがらも同様に分かち合うことができる」初代教会の姿と照らし合わせて、今の現実の教会のありようを検証してみましよう。

派遣される

エマオで主と一緒に食事をした二人の弟子は、時を移さずすぐに出発して、「私たちは主に出会った」と伝えにいきます。同じように私達も、ミサでキリストの語りかけを聞き食事をしてキリストに出会ったならば、その喜びを自分の中にだけとどめておくことはできない。時を移さず、すぐ伝えに行くはず。キリストを運んでいく者になるわけです。それが派遣です。

キリストは一人ひとりの信者の中に入っていく。受け取った一人ひとり、証しを通して社会に伝えていく、広げていく。聖体と

はそのようなあり方をするもの

感謝

派遣されてその使命を果たすための根本的な要素は聖体・エウカリステリアという言葉の中に既にあります。それは、感謝する、ということ。私たちの生活の中で「ありがとう」という思い・言葉・姿勢はどれだけの部分を占めているでしょうか。ゴルゴタで十字架にかかって死なれたイエスは、御父に対して無条件で「はい」と答えられました。その「はい」は私たちの「はい」「ありがとう」「アーメン」をも先取りしてくださったものです。私たちがキリストの「はい」とつながっています。

私たちが「神を忘れて人間の自己充足を追求する現代の文化の中にあつて、神との関わりなしには人間は正しいものとなれないこと」の証人となっていくのですが、それは「エウカリステリア・感謝する姿勢」が基準となります。

奉仕

聖体を生きる者は最も小さい者への奉仕へと当然導かれます。苦しんでいる人への配慮をどれだけ私たちができるか。私たちがささげる感謝の祭儀が本物であるかどうかは、小さな人々にどれだけ自分をささげていくことができるかにかかっています。

教会のすべての人へ「主よ、一緒にお泊まりください」の結びには次のような呼びかけがあります。

「司祭の皆さん、あなた方は日々聖別の言葉を繰り返して、あなたの手で行われる愛の偉大な秘跡の証人であり使者です。あなた方が初ミサを立てたときの同じ喜びと情熱を持って、日々ミサ聖祭を行ってください。

奉獻された男女の皆さん、聖櫃の中のイエスが、あなた方にその傍らにいてほしいと願っていることを決して忘れないでください。

キリスト信者の皆さん、非常に多くの異なる状況のただ中であつておのおの仕事をすることで、世にあるあなたがたの日々の生活のための光であり、力である聖体のたまものを、あなた方皆が再発見しますように。家庭のすばらしさと使命を十分に経験するため、何よりもこのたまものを再発見してください。

この使徒的書簡の中で、ヨハネ・パウロ2世が「やってみましよう」と提案していることがいろいろあります。「聖体の年」は10月までですが、この期間に私たちが何か実行出来れば、いいと思います。



第33回カトリック宮城県大会

7月3日(日)、加美町中新田の通称ハツハホールには、県内各地から、自家用車や貸し切りバスで515名(主催者発表)が集まり、ホール内はほぼ満席となった。

耳を傾けた。昼食後、午後からは、平賀神父主司式のもと、14人の司祭による共同司式ミサがささげられた。ご聖体をいただいて、主と出会った信徒たちは、いざ福音宣教の地へと派遣されていった。

カトリック宮城県大会を

振り返って

大会実行委員長 渡辺 征子

(古川教会)

『聖体の年』にふさわしい県大会に！

宮城県信徒連絡協議会会長の伊藤健一氏(一本杉教会)「写真」は、「全カトリック教徒が敬愛するヨハネ・パウロ2世教皇の逝去を悼み、同教皇の使徒的書簡『主よ、一緒に泊まりください』をテーマに据え、聖体の年にちなんで、その神髄を十分に味わいたいと思う」と開会の挨拶を述べた。

今年の、カトリック宮城県大会は、加美町中新田文化会館(通称ハツハホール)にて開催されましたが、演奏を聴くための会場で、一日過ごす場としては、昼食の場所の狭さなど不安がありました。

「聖体の年」にあたり、各県大会のテーマは、このことを取り入れるという教区顧問団の提案を、県信徒連絡協議会が受けたのは2月で、大会骨子が確定したのは5月、大会まで40日間ほどの準備期間でした。

木しのぶさんによる、パイプオルガンの演奏に

また、町村合併で、会場の関係機関の事情が複雑になったこともあり、警察署、保健所などの届出の変更を余儀なくさ



れる事態も発生しました。問題を抱えながらも、一つ一つ不思議な方法で解決し、神様のおかげを感じておりました。

主催は県信徒連絡協議会、実行は県北5教会です。県北の地域的特性を生かした大会運営が出来たと思っています。今後も、地域ごとの教会の協力で、地方での大会を継続していければいいのではないかと思います。

福音宣教、小教区間の新しい結び付きを考え、仙台以外での県大会実施に踏み切って3回目ですが、今回、準備期間が短かくなつたことで、全教会の協力を頂くことが出来、地方の大会でも会場いっぱい参加者が集まりました。また、教会

学校教師会のご協力で、喜びあふれる子供たちの声が響きました。

県北地区教会代表者が、会場視察をして決定する以前に、イエス様が、この会場での開催を望まれ、準備されていたのではないかと思います。不行き届きな点は多々ありましたが、ご容赦ください。ご参加、ご協力、ありがとうございました。

「福島県カトリックの集い」開催予告

来る9月19日(月・敬老の日)に、「第35回福島県カトリックの集い」が松木町教会で開催されます。

き石巻教会主任司祭佐々木博神父様にお願ひし、テーマは「エウカリスチア・交わりと一致の秘跡 エマオへの旅の追体験(ルカ24・13-35)」となりました。

「集い」では、講話と小グループの話し合いをおして、私たちがミサとご聖体を大切に、それによって生かされていることを実感し、生き生きしたミサへの参加をはじめ、あらゆる取り組みが、深い内面によって裏打ちされたものとなるよう霊的刷新の歩みを進めようとするものです。

テーマは、ヨハネ・パウロ2世教皇様の勧めに従って、ご聖体についてよく理解し、観想するために使徒的書簡のタイトルそのままに「主よ、一緒に泊まりください」をテーマとし、サブテーマは「聖体 交わりの源泉」と決まりました。

同時に「こどもの集い」も開催します。こどもたちは、前日からマルグリット・ブルジョワセンター(旧ノートルダム修道院)で合宿します。子供ミサやレクリエーションを通して、神様と友達の出会いを感じ、心に残ることを願っています。小学生と中学生は別のプログラムで進め、翌日全体のミサの時に合流します。

「集い」は、講話、小グループによる話し合い、ミサ聖祭・聖体賛美式で構成されます。

中学生は、小学生の世話や、全体ミサの侍者などの奉仕も受け持つこととしています。(担当 県北地区実行委員会)

講話は、昨年に引き続

戦後60年 真の平和を求めて...

核廃絶と 平和を求めるミサ

7月16日は毎年特別な思いで迎える日だ。この日は、アメリカ・ニューヨーク州アラモゴードにある実験場で人類最初の核実験が行なわれた日である。

戦後60年を経た2005年7月16日午後6時30分よりカトリック元寺小路教会で、今年で14回目となる「核廃絶と平和をを求めるミサ」がささげられた。戦争で死んでいった方々を思い、被爆体験者や戦争体験者の共同祈願は、平和を求める思いにあふれ、参加者の心を



ゆさぶった。

世界の核兵器を取り巻く環境は、年ごとに難しく、解決困難な様子だが、対話を通して、人類には無用の核兵器が世界の国々から廃絶されることを心から望むミサであった。

(カトリック正義と平和
仙台協議会 氏家 昭)

教区主催

平和を求めるミサ

今年の平和旬間が始まる初日、8月6日(土)午前11時から、元寺小路教会で、教区管理者、平賀徹夫師主司式による、平和をを求めるミサがささげられた。写真左上。平賀師は、説教の中で、「私たちは、平和のために呼ばれている。『祈るしかない』と言つのではない、祈りから始めなければならぬ。いまから行動に移していきたいと思います。」と、励ました。

池田香代子さん講演会

「憲法9条を世界の宝に」

8月6日(土)、この日はヒートアイランド現象で猛暑の一日。汗を拭き拭き参加した講演会。

そんな中、池田さんは、ずっと立ったまま熱心に話された。

池田香代子さんは本業の翻訳業(ドイツ文学)の他に一年

に160回もの講演や、世界平和アピール七人委員会の一員としてマスコミでの発言など多忙を極めている。



「情報とは知りたいことを知り、情(心)に報いること」と語る池田さんは、ITの利用による情報の収集と発信、メールを利用したマスコミへの働きかけを実践し、講演の内容も自身の体験を中心にしていることで、多くの人に感銘を与えている。

「私のスタンスは、新しい風、新しい情報、新しい知識を、ねえ！ねえ！聞いて、聞いて、とヤジ馬のように、あるいは主婦の立ち話のように、わくわく、ドキドキすることを身の回りの人々と分かち合う」ことを自分の活力としておられるとのこと。

味方にして社会と国のあり方を方向づけて行くヒントを与えて下さった。それは、放送局や新聞社に、ハガキを出すということ。

「この番組はとても良かった。もっとこういう番組を増やして欲しい」と、マスコミで働く人を励ますことだという。一通のはがきの裏に同じ考えの人が多数いると考えるのがマスコミの常識だそう。このような投書が増えることで、いい番組(記事)を作っている人に力を与えることができるという。

「私はクリスチャンではありません」という池田さんだが、話を聞きながら福音宣教の本質に触れたような気がした。心の発露のまま、さわやかに話される池田さんは、風のようにすがすがしい方であった。

(氏家 昭)
(講演要旨は、5頁に掲載)

8・15 平和を求める キリスト者合同祈禱集会

「戦後60周年を迎えて、キリスト者は何をすべきか聖書から学ぶ」をテーマに、今年の合同祈禱集会は、8月14日(日)午後2時から、元寺小路教会大聖堂で行われた。

開会の歌、「キリストの平和」が歌われ、聖書朗読では、平

和を実現する人は、幸いである、その人たちは、神の子と呼ばれる(マタイ5・9)と使徒パウロのエフェソへの手紙(2・14・19)が読まれた。

『平和を実現する人』と題して、日本基督教団青葉荘教会の島隆三牧師「写真」が「平和を実現する人はキリストご自身である。私たちは、キリストに似たものとなったとき平和を実現する人になることが出来る。

平和は、反対運動や抵抗運動で実現するのではない。平和を実現する人として、キリストの十字架上のいけにえによって、新しい人にならなければならぬ。」と、熱く語られた。

続いて、10のグループに分かれて分かち合いが行われた。その後、まとめの祈りとして、各グループの代表者が、一人ずつ祈りをささげ、全員で、「聖フランシスコの平和をを求める祈り」を唱えた。派遣の歌として賛美歌「主のうちにこそ」を歌って散会した。

歌って散会した。



池田香代子さん講演会

「憲法9条を世界の宝に」

主催・カトリック正義と平和仙台協議会

100人の村基金

全ては、あの2001

年9月11日の出来事が原点です。それまで私は、世界のことや、政治のこと平和のことについて、あまり関心があるほうではありませんでした。

9・11のあと、なぜ報復なのか、なぜ攻撃なのか、なぜアフガンスタンなのか、わからないことがいっぱいでした。知りた

いと思って、アフガンスタンで医療ボランティアをずっと続けているペシヤワール会の中村哲先生の講演を聴きに行きました。とても感動しました。何かお役に立ちたいと思いました。その講演で、中村先生は緊急募金を訴えておられました。募金なら何かできると思いました。

自分に何ができるか、ということを考えて、インターネットの中で10年近く民話のように流れていた100人村をまとめて出版し、その印税を中村先生に100万円位募金できればいいな、と書いていました。

結果は予想を遙かに超え、本は、

130万部に達し、印税は、税金等を除いて3480万円に

達しました。結局、中村先生に100万円を受け入れていただいた残りで、100人村基金を作りました。その基金を使うための調査をしているうちに、

いろいろなことが分かってきました。



憲法は私たちのもの

日本国憲法の英語版を、今の若い人にも分かりやすいように翻訳しました。

憲法前文は、英文では、「We, the Japanese people」から始ま

っているんです。つまり、『われら日本国民は……』というところで、自分たちの憲法だ、というイメージがはっきりしています。

最近、憲法改正という文字が新聞に躍っています。でも、憲法改正を叫んでいる自民党の議員の中で憲法9条を変えてはならないという人が70%もいるんです。

憲法は、権力を縛るものです。主権者である私たちが、権力者である政治家の行動を縛るためにあるんです。私たちに、人権があります。政府は何をするにもこの人権を守らなければなりません、と主張するものなのです。

憲法改正論者の言い分
その政治家たちが、憲法は都合悪いから変えよう、と云っている。

憲法に対する批判はだいた

い次のようなものです。
(1) 現行憲法は、権利ばかり書いていて義務が書いていない。バランスが悪いといえます。そうではないんです。憲法というのは、私たちの権利宣言なのです。

(2) 日本国憲法は、敗戦後国民が茫然自失としているうち

に、否応なくGHQに押し付けられたものであるとも言われています。

敗戦後の人々は、茫然として立ち上がって家族のため、社会のために懸命に働いていたのです。

(3) 憲法のたたき台は、アメリカ人が世界中の憲法をつぎはぎして1週間で作ったものであるとも言われています。

このたたき台を21人のアメリカ人が、1週間で書いたというの

は事実です。実は、鈴木安蔵と言う憲法学者を中心としたグループが既に憲法草案を作っていたのです。これがすばらしく民主主義的なものだったのです。これを中心にして、

世界各国の憲法を参考にまとめたものなのです。アメリカ人が作ったものを押し付けられたというの

はあたらないのです。
(4) 60年前に作られた理想であって、現実にはすぐわな

いと違う人もいます。
憲法は、主権者である私たちが、権力者である政治家の行動を縛るためにあります。その政治家たちが、憲法は都合悪いから変えよう、と云っている。それはとても変です。

マツカーサーは、吉田茂に、憲法(9条)を一年で見直したらどうか、と示唆しています。朝鮮問題の予感があったのか

もしれません。でも吉田茂は、「憲法を見直す必要なし」と、三行半にも満たない簡潔な返事を書いていました。彼は、いろいろ言われるけれど、憲法を守った優れた政治家でした。

自分でできることをする。自分ができることを、一人ひとりがする。これなら自分もできる、ということをする。これ

はとても大切なことです。五つの呼びかけ
そこで私は皆様に提案させていただきます。

(1) 今の気持ちを五人の人に伝えること。
(2) マスコミを育てること。

いい記事やいい番組の記者や番組制作者にメールを送るのは、メディアの外にいる私たちの仕事なのです。是非とも葉書を出してほしい。
(3) 地産地消をすすめること。

地元で取れたものを地元で消費することは、地球環境を守る上からも大切なことです。
(4) 選挙に行きましょう。

(5) いつも笑顔を忘れないで下さい。

「共に生きる」

仙台教区人権を考える委員会

今回は、福島・松木町教会の取り組みを信徒の駒田瑞穂さんに紹介していただきます。

10年前、娘がアメリカの大学に通っていたとき、お世話になっていたホストファミリーに「どのようにお返しをしたらよいか、わからない」と話すと、「私たちに返す事はないのよ。日本で困っている外国人に声をかけて下さい」と話された事が、私が外国人に深く関わる原

点でした。ちょうど、その頃、フィリピン人の友達がかトリック教会は無関心、教会に来てもらって、相談にものつてくれないので、他の親切にしてくれるプロテスタントの教会に皆行っている。本当はかトリックなのにという声を聞きました。

これは大きな問題だと思い、教会に来る不安そうな外国人に常に笑顔で声をかけ続けているうちに多くの友人ができました。ある日、教会の方から月一回、英語で聖歌を歌っても

らえないかという声がかかりました。彼らに話したところ「幸せ」と話し、英語の聖歌隊セシリアンファミリーが誕生し現在に至っています。そして、その練習のために仲間が増え、日本人もいっしょになりコンサートを開いた事も何度かありました。また、教会バザーでは国際コーナーを作ってもらい、お国自慢の料理を並べて異文化交流を楽しんでいます。結婚、仕事、学生として来日している人々にとって言葉や習慣、国民性の違いで悩んでいる人々が多くいます。難しい問題

典礼の霊性を深める

神学顧問 佐々木 博

交わりと一致の源泉を求めて 信者同士の人間関係に亀裂、対立や反発が生じてしまうと、典礼行為は内側から崩されてしまいます。特に、エウカリスティア(感謝の祭儀)は、交わりと一致の源泉としての役割を、事実上果たせなくなります。たとえ、「交わり」の儀で、同じイエスの体を分かち合っても、お互いの心の中に分裂が残っているなら、まさに偽善になってしま

が伴わない形式的なものになります。ですから、「ミサの「開祭の儀」の中での、回心の祈りによって、お互い同士心から赦し合い、和解し敵対心をすっかり取り除くことが肝心です。共同体の中で躓きになるようなことが、起こってしまいますが、そのときこそ赦し合い、仲直りをしなければならぬのです。そのために聖霊の助けが、どうしても必要です。「聖霊を受けなさい。だれの罪でも、あなたがたが赦せば、その罪は赦される。だれの罪でも、あなたかたが赦

さなければ、赦されないまま残る」(ヨハネ20・22・23)。確かに、エウカリスティアに相応しく与ることによって、共同体の中に真の交わりと一致がみなぎって来ます。しかしながら、そのためにお互いの真の回心が、どうしても必要です。自分自身が変わらねばならないこと、交わりと一致の秘跡に与るといふことが、同時進行していくのです。そのときこそ、『教会憲章』序文にあるように、教会が世界に対して、一致と交わりの秘跡となれるのです。



ミサで歌うセシリアンファミリー

がおこると、いっしょに法務局に行ったり、弁護士に相談したりしています。

信仰心の厚い彼らが母国語で祈り、分かち合いを通してすべてを神にゆだね癒しあっている姿に感動した事が何度もありました。彼らの一人は、「人生は素晴らしい。それは神様からのプレゼントです」喜びのときも悲しみの時も共に生きてくれると言っていました。嬉しい事に彼らの子供たちも教会や中高生会活動の核となり教会を支えてくれていました。現在、彼らは教会が必要とされている事に気づき、自分達の居場所を見つけたようです。私も違いを受け入れ、心豊かに過ごすためにこれからもさり気なくサポートしていきたいです。

塩と光

「実に、信仰は聞くことにより、しかも、キリストの言葉を聞くことによって始まる」(ローマ10・17)。神に聞き従うことが信仰の基本です。信仰の恵みは、霊的な受信機をいただくことです。この受信機をしっかりと作動させるなら、必ず神の語り掛けを受信できるようになります。特に、日々キリストの語り掛けに霊的な耳を、静かに傾けなければなりません。「わたしの言葉が、あなたがたの内にもあるならば、望むものを何でも願いなさい。そうすればかなえられる。あなたがたが豊かな実を結び、わたしの弟子になるなら、それによって、わたしの父は栄光をお受けになる」(ヨハネ15・7・8)。信仰を生きることは、イエスの弟子になること、しかも豊かな愛の実りを結ぶことです。一回限りの人生において豊かな実を結ぶこと

によって、神に栄光を帰すのです。そのため、自分の人生を良い土地にしなければなりません。「良い土地に落ちたのは、立派な善い心でみことばを聞き、よく守り、忍耐して実を結ぶ人たちである」(ルカ8・15)。実りの秋に、信仰の実りを結びたいものです。(博)



WYD・ケルン大会

「私たちはイエスを拝みに来たのです」

(マタイ22)

2005年カトリック世界青年の日(ワールド・ユース・デー)は、8月15日から21日まで、ドイツ・ケルン市において開催された。世界各地から約100万人の若者が集い、21日には、教皇就任後初めて海外を訪れたベネディクト16世によるミサが行われた。

仙台教区からは、木村国基神父をはじめ総勢18名が参加した。大会参加の報告は、次号に掲載する予定であるが、出発前に、大会に期待することや、出発前の意気込みを、聞いてみた。

M・M(一本杉教会)たい喜び、たくさんの賜物を胸
東方の三博士に倣って、私たの奥深く大切に守り、その気持ちも星に導かれて、東方の国、ちと感動を、自分が変わってゆくことと皆さんにお伝えすることが出来ますよう祈りながら参ります。

ケルンの地での出会い、得が



参加者に祝福を送る教皇ベネディクト16世

野田 智子(八木山教会)
今私はこのケルン大会に参加するよう導かれていたと実感しています。それは何故か、今はまだわかりません。しかし、三人の博士たちがイエス様に出会い、真の深い喜びを感じたように、私もこの大会で神様の呼びかけや導きである星を見つ、忠実に星の導きに自分を委ね、真の深い喜びを経験し、みんなとその喜びを共有したいと思います。

また前回のトロント大会後

に青年活動が活発になったのを感じました。そして私も今回参加するにあたり小教区を越えて多くの青年と交わり、明日の教会を担うものとして一人一人が教会の活性化の原動力になればと思っています。

H・R(北仙台教会)

もう3年前のことなのか、と思ってしまう程あつという間に前回のトロント大会から時間が経っていました。

僕はトロント大会には参加していませんが、あの頃初めて溝部司教様と出会い、トロントに行つたみんなと出会い、多くの神父様やシスターと出会い、新しい仲間と出会い、人との関わりの中で自分を見つめることができたかと思えます。

そしてついに自分もケルン大会に参加することができて今とても興奮しています。仕事を長期で休まなければならなかったのは大きな犠牲ですが、たくさんの仲間と出会い、歴史ある地に足を運び、普段味わえない多くの体験から自分の中心のイエスに出会いそれが祈りにつながればと思います。支えていただいた多くの方々に感謝しながら巡礼したいと思えます。

視覚障がい者

アンジェラスの会総会

視力の不自由な方々でつくるアンジェラスの会は7月18日(月)、元寺小路教会で第13回の総会を開いた。

今回、会員のための『毎日の祈り』を作成することが出来た。今年の総会の目的は「心の目を」(エフェソ1:16)そして、テーマを「聖霊と教会・いま」をもとに集まった。

佐々木博神父は、ミサ中の第1講話で、マタイ12:38・42からヨナの話聞き、悔い改めた二ネベの人々を引用されて、「毎日神にそむくことを見聞きする現代社会の回心がすすむように祈りましょう」と結ばれた。

第2講話「聖霊と教会・いま」

では、4つに分けて話された。
1. 聖霊のはたらきによって教会が誕生したこと

2. 教会は世界に対して一つの秘跡的役割：しるしであり道具である

3. 教会の活動を導いておられるのは、聖霊ご自身であること
4. いまこそ、聖霊の時代であることを話してくださった。

私達も聖霊に導かれる体験を持つことが大切と結ばれた。

* 近く、今年と昨年の講話が一枚のCDになります。連絡は022-2913320(笠原まで)

新刊案内

『原子野からの旅立ち』

編者・発行所 女子パウロ会
定価 2000円+税

ヒロシマ、長崎で原爆投下60年。本書は、そのヒロシマと長崎で被爆された26人の証言を集めたもの。毎年、被爆者の証言の大切さが訴えられているが、高齢化により、年々証言者も少なくなっている。本書は、自分の苦しい体験を語ることで、平和な21世紀になってほしいという著者たちの切々たる心が伝わってくる。

著名な画家・平山郁夫氏や、元長崎市長・本島等氏などの証言も含まれているが、本書を読んで一番心を打たれるのは、一人ひとりがゆるしていることである。「うらんでいる心からは、平和が訪れない」ことを知っている心貧しい人々の言葉は、読者の心を揺さぶるであろう。平和をヒロシマと長崎でアピールされた、教皇ヨハネ・パウロ2世の言葉が改めて新鮮に響く。

原子野からの旅立ち



夏だ！ キャンプだ！ 合宿だ！

恒例のサマーキャンプ

盛岡地区

盛岡南昌山の麓、「つどの森」に於いて7月30日(土)31(日)の2日間、盛岡地区3教会合同小中学生のサマーキャンプが行われた。参加人数は木村神父様はじめ、子供18名、リーダー15名(大学生も含む)とサブリーダーとして高校生2名の36名。



盛岡白百合学園のご好意によりバスを出していただき、10時に志家教会を出発。初めて参加する子は不安そうだったが、毎年参加している子ども達が、明るく全体を盛り上げてくれた。「つどの森」に着くと、さっそくスケジュールに従って行動開始。オリエンテーション・追跡ハイクの後昼食。木陰でゆっくりした後、ゲー

ムやスイカ割り。

スイカ割りにはハッスルしすぎて棒を折ってしまうほど。大歓声の中、甘いスイカで咽を潤した。飯盒(はんごう)を使った炊飯もリーダーの指導で、おこげを奪い合うほど上手に出来た。キャンプ定番のカレー作りは女子の出番。一日を感謝して夕食。そのおいしさは、お変わり5杯の子に代表される。夕暮れを待って夜のイベント。光について黙想した後、木村神父から、「キリストの光につつまれている私たちは、どんな時でもその光に従って歩みましょう」と、お話をいただいた。

その後、花火やマシマ口焼きを楽しみ、就寝の準備をしてテントの中へ。神父様は各テントを回って夕の祈りを共にしてくださいました。夜もふけたころ、天からの雷雨の贈り物にびっくり。幸いに、子供たちは疲れてぐっすり、その寝顔を見てほっとする。

朝になり、雨もやんでセミの声にぎやかに聞こえたが、あたりは水浸し。何とかテントを片付けて志家教会へ。子供たち

と共にミサをささげ、十字架上のイエス様と、お世話になった多くの人々に感謝しながら、また来年会えることを楽しみに、今年のキャンプは終わった。(志家教会・佐藤久仁子)

中高生会サマーキャンプ

仙塩地区

仙塩地区中高生会は、8月6日8日の2泊3日、気仙沼教会にてサマーキャンプを行った。3日間、お天気にも恵まれ、大きな怪我もなく、素晴らしい時間を過ごす事が出来た。これも、神様のお恵みと皆様

方のお祈りとご支援の賜であると、心より感謝している。



今回のキャンプは、本年度の中高生会の初めての宿泊行事。また、夏休み中は部活動など、子ども達も色々な予定があり、「何人の子ども達が参加してくれるのだろうか」という不安もあったが、結果的には10名の中高生と共にキャンプを分かち合う事が出来た。地図を頼りに気仙沼を散策するオリエンタリング。一つの課題を班のみんなと解きながら

仲良くなった子ども達は、夕飯の準備や肝試しなどにも積極的に参加し、楽しい一日目を過ごした。

二日目は、朝に気仙沼教会の信者の皆様方と共にミサに与り、その後、船に乗って大島へ。キャンプのメイン・イベントである海！青く澄んだ空と暑い熱気はまさしく海水浴日和。透き通った海の中を泳ぎ、砂浜で思いきり遊び、夏の日差しを満喫した。夜は港祭りの花火を見ながらのバーベキュー。心も体もお腹一杯に楽しんだ。

三日目の昼は、夏の風物詩の流しそうめん。舌鼓を打ち、その後、電車に乗って仙台へ。皆、疲れていたはずが、電車の中でも思い出話に花が咲く。子ども達がそれほど楽しんでくれたこと。リーダーにとってはそれが一番の喜び。

キャンプは終わったが、中高生会の活動はこれからも続く。神様と皆様方の愛に包まれながら、一人でも多くの子ども達と共に一歩一歩、歩んで行けたらと願っている。(東仙台教会・赤井悠蔵)

<シリーズ> 188名日本殉教者列福の推進 加賀山みやの殉教 熊本の殉教者 熊本の殉教者 熊本の殉教者

みやの父は小倉の殉教者加賀山隼人である。隼人には3人の娘がいた。みやは長女であり、同じ家老の小笠原小斎の次男玄也に嫁いだ。小斎は細川ガラシア夫人の自刃を助けた家老であった。禁教令(1614年)後、

玄也夫妻はしつこく棄教を迫られた。「忠興様何と仰せ出され候とも、転びまじく候」という有名な手紙を主君に送って、信仰を表明した。父隼人の死後は祿を剥がれて貧苦にあえいだ。細川家が熊本に転封された時に共に熊本に移り、やはり信仰を貫いて生きた。二代藩主細川忠利は玄也の幼友達であり、彼らを処刑するのは好まなかった。しかし、家中より訴人が出て、これ以上彼らをかばうことは困難となった。1635年玄也夫妻、子供9名、使用人4名、計15名は一軒の家に監禁された。50日間牢にあつて、親しい人々にあてて遺書を残した。「捨てがたき宗旨故、かようになり参らせ候」とみやは書いている。1636年1月30日、熊本神楽院にて殉教。

各地から

青森 浪打教会

聖母被昇天祭

ねぶたが過ぎてても相変わらず猛暑が続く青森の8月、カトリック浪打教会では、カトリック墓地の墓参(7日)、聖母被昇天祭のミサ(15日)を本町教会と合同で行いました。特に15日の宵には、聖母被昇天会の聖堂でミサが行われ、雰囲気としても最高の気分を味わいました。またその場で成人の男女2名が受洗し、参列者すべてから祝福を受けました。



ミサ終了後、マリア様のみこしを先頭に、聖歌を歌いながら教会まで行列し、恒例の「夕涼み会」写真が始めました。やや涼しさが増した教会の駐車場いっばいにテーブルがセッティングされ、それぞれの家庭から持ち

寄った自慢の一品料理が出されました。辛口の自称料理評論家たちもこの夜だけは口数も少なく、それぞれ違うおふくろの味に舌鼓を打っていたようです。2つ

並んだビール樽はどんどん軽くなり、後半には「ねぶた」なる冷酒が振る舞われました。修道院特製の料理や小松神父お得意の炭火焼きも大好評、家族ぐるみでの交流もあちこちでみられ、とても充実した夕涼み会でした。

宮城 気仙沼教会

(白下昭夫)

4月司祭異動でカルロキ工

神父様がイタリヤ帰国し、新たに主任司祭として

韓国出身の尹汝沃(ユンヨウク)神父様が着任されました。神父様はことばや習慣の違いなどの壁を乗り越え、早く気仙沼に慣れようと努力されています。

1880年宮城県では元寺小路教会について二番目の教会として設置され、大天使聖

ミカエルを守護聖人としていたでいる教会です。

聖堂は、築96年、ロネスク様式を取り入れた木造の建物です。私たちは先人の祈りと数々の思い出のいっばい詰まっているこの聖堂を改修を続けながら、信仰のよりどころとしてできるだけ長く使用していきたいと思っています。

6月には豊屋丁教会の皆様方、7月には元寺小路教会婦人会の皆様方が巡礼に見えられ、私たちも一緒にミサをささげ楽しい交流の時を持つことができました。

また、8月初旬には氏家神父



キエザ神父様送別会 2005.3.27

様引率での仙塩地区中高校生サマーカーンプが当教会を会場に行われるなど、訪問客が多く、気仙沼教会は大変な賑わいを呈しております。どうぞ皆様も観光を兼ね巡礼にお出かけください

来る9月11日(日)は、大天使聖ミカエ

ルのお祝いとあわせて教会の敬老会が行われる予定です。

宮城 西仙台教会

(小山明夫)

100周年記念事業委員会、カトリック西仙台教会は2008年に教会設立100周年を迎えます。

教会前身の角五郎丁教会(またの名を北五十人町教会)は、仙台教区がまだ函館教区だった今から約百年前に創立されました。このため教会では100周年記念事業委員会が組織され、100年史の編纂を行っております。

教会出身の司祭は、故佐藤千敬司教、笹氣直哉神父、高橋字神父(新潟教区)の3名です。今、西仙台教会では100年の歴史を掘り起こす活動が活発になっております。

(上野 隆)

福島 白河教会

東北の玄関口、白河駅から歩いて数分のところに、最後の晩餐のイエスさまのことばを書いた大きなパネルが掲げられている蔵作りの建物があります。カトリック白河教会です。

私達の教会では「聖体の年」の豊かな実りを求めて動き始めました。



先ず典礼の見直しです。聖書朗読は担当を前もって決めて準備をし、朗読して頂くことと人を募りました。するとそのために聖書朗読の勉強をしましようという声があがり、第一回の集まりを7月にもちました。孫引きになりますが、加島祥造さんの言葉に「声は息から出る」であり、息は生きた命から出る。文字にひそんでいる声を聞きとるのは命のメッセージを感じることだ。』という一節があるそうです。文字にひそむ声を聞き、そのイメージをしっかりと他者に届ける。何とすばらしいミサ参加でしょう。この提案によりあらためて聖書朗読の重要さを知らされております。幼い歩みの遅い共同体ですが少しずつ良いものへと努めております。(熊谷幸子)

活動紹介

春風の家と

かつらdeサポート

約400名の市民の方々に会員になって頂いている「ホスピス設置を願う会」では、2年ほど前から、仙台市中心部で週2回（6月からは週1回、火曜日）、看護師さんによるがんなどの病気の相談サロン「春風の家」を開いてきました。そしてこの8月からは、相談の他に抗がん剤治療による脱毛に悩む女性患者さんを対象に、かつらの貸し出し（名称「かつらdeサポート」）をスタートさせました。

私たちの取り組みを河北新

私の気分転換

人、自然との出逢いの中で
 気仙沼教会主任司祭 尹 汝沃
 私は、今年4月から気仙沼に着任しました。
 皆さんもご存知のように、この地は海に囲まれていますが、教会から近いので、たびたびこの海岸通りを散歩します。特に夜がいいですね。
 考えをまとめるのにとて、良い場所です。夜ですから人通りはありませんが、たまに、釣りをしている人や、

報の女性記者の方が一度も、大きく取り上げてくださったお陰で見知らぬ方々から家庭で眠っていたたくさんのかつらが寄せられ、記事を読んだ美容師さんが協力を申し出て下さいました。医療相談だけのときは静かだった「春風の家」は、にわかに活気（？）づき、利用希望者の来訪と、問い合わせの電話で目の回るような忙しさになりました。但し、このような状況が続けば、かつらの在庫も底をついてしまうことも予想されますので、もしお使いにならないかつらがありましたら、寄贈いただければ有り難く存じます。

散歩している人達と話したり

することもあります。その話の中で、今まで自分の考えにはない思いもよらない言葉が返ってきたりします。
 その言葉に心を動かされ、彼らを通して神様が教えているという事に気付かされる時もあります。その出逢いを大切にし、また、新しい明日を迎えるための心の準備をする、この海があつて良かったと思えます。



かつら装着の講習

かつらの使用料は6ヶ月につき1500円。問い合わせ電話は022-265-3580（火曜日のみ）です。

（一本杉教会 小野敬子）

修道院紹介

オタワ愛徳修道女会

本部・東仙台修道院

東仙台の小高い丘に、緑の木々に囲まれている私たちの修道院は、周囲に司教館、司祭の家、スベルマン病院、東仙台教会と、祈りの雰囲気につつまれて、ひっそりと建っている。

県外、県内、時には国外の方々にも必要に応じて開放し、出会いと分かち合いの場となっている。姉妹は元寺小路教会受付で、訪れる方々と親交を深め、また、特別養護老人ホーム・パルシアでは人生の先達者方への援助、他の姉妹は、各地を巡り歩いたイエスに倣い、各地

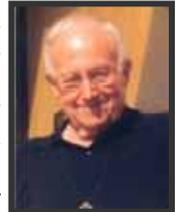
方での黙想、研修指導、80歳を過ぎた高齢の姉妹は顔をほころばせながら花を生け、院内の種々の仕事を祈りながら黙々と奉仕をしている姉妹など、それぞれの役割を果たしながら使命を生き、創立者の遺言である「皆ひとつになつて、ただ、ひとつの心、ただ、ひとつの魂をのみ、形成するようにしなさい」との言葉を現代に受け継いでいる。
 （Sr.赤坂）



オタワ会修道院の聖堂

訃報

ヨハネ・ローネル神父
 ベトレヘム外国宣教会
 2005年7月20日、スイス・インメンゼーの



本部で帰天されました。享年86。
 ローネル神父は1945年司祭叙階、1950年日本に派遣され、岩手県遠野、盛岡、水沢の教会で宣教司牧に励まれました。特に水沢教会では寿庵祭の隆盛のために長年かけて力を尽くされた。1991年スイスに帰られ、高齢者訪問などの仕事をされていたが2000年から本部で療養生活を送られていた。

スール・マリア・アルベルタ
 稲次 やすよO.P.
 聖ドミニコ女子修道会
 北仙台修道院にて、2005年6月27日帰天されました。



1951年入会以来、長年にわたり、院内の仕事、天使園、学校の仕事の手伝いなどを誠実に勤めた。
 誓願後56年・享年82。

永遠の安息をお祈りください。

おしらせ

仙台ロゴス研究所公開講演会
 演題『身近なところから見た二人の教皇様』
 講師 ピタウ大司教
 日時 10月2日(日)午後2時
 会場 カトリック北仙台教会
 入場無料